

熊取町埋蔵文化財調査報告第20集

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・Ⅶ

1993年 3月

熊取町教育委員会

は　し　が　き

はるか昔に生活の場として人々が私たち熊取の地に根をおろし、土地を開墾し、文化・産業を発展させたことにより現在のこの熊取町の姿があります。この人々が築き上げてきた文化に触れることのできる貴重な文化財のひとつが埋蔵文化財であります。しかしながらこの埋蔵文化財は全国的に近年の急速な土地開発等により消滅の危機にあります。特に泉南地域は関西新空港に伴い各種の土地開発が急速に行われており、本町においても数多くの埋蔵文化財が破壊の危機に直面しております。

このような社会状況の中で、本町教育委員会では破壊されてゆく遺跡の記録・保存を行うために、土地所有者をはじめ関係者各位のご理解とご協力を得て発掘調査等を実施してまいりました。本書は、平成4年度中に国庫補助を受けて実施した発掘調査成果を概要報告書としてまとめたもので、泉南地域の歴史解明のための一資料となり、文化財保護活動の一端を担うことができればと念願し発刊したものであります。

最後になりましたが、現地での発掘調査にあたってご理解とご協力をいただきました土地所有者並びに関係者各位に厚くお礼申し上げますとともに、文化財保護に対するより一層のご理解・ご協力をお願い申し上げる次第であります。

平成5年3月

熊取町教育委員会

教育長 七里 弘

例　　言

1. 本書は、熊取町教育委員会が平成4年度国庫補助事業（国庫補助率50%、府補助率25%、町補助率25%）として計画し、町史編さん室が実施した熊取町遺跡群発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会町史編さん室 阿部 真を担当者とし、平成4年4月1日に着手し、平成5年3月31日をもって終了した。
3. 本書における図面等の方位は地図以外について磁北を示すこととした。
4. 調査の実施と整理にあたっては、山本恵子、阪口雅美の両名の協力を得た。
5. 本書の執筆・編集は阿部がおこなった。

目 次

はしがき

例 言

第1章 はじめに	1
第2章 地理的・歴史的環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	6
第1節 東円寺跡の調査	6
1. 92-3区の調査	7
2. 92-4区の調査	9
3. 92-6区の調査	11
第2節 久保城跡の調査	12
92-1区の調査	12
第3節 大谷池遺跡の調査	14
92-1区の調査	14
第4節 口無池遺跡の調査	16
92-1区の調査	16
第4章 おわりに	18

挿 図 目 次

- 第1図 熊取町の位置
- 第2図 熊取町内遺跡分布図
- 第3図 東円寺跡調査区位置図
- 第4図 東円寺跡92-3区 調査区設定図
- 第5図 北壁断面図
- 第6図 東円寺跡92-4区 調査区設定図
- 第7図 東壁断面図
- 第8図 東円寺跡92-6区 調査区設定図
- 第9図 平面・断面図
- 第10図 出土遺物
- 第11図 久保城跡調査区位置図
- 第12図 久保城跡92-1区 調査区設定図
- 第13図 平面・断面図
- 第14図 大谷池遺跡調査区位置図
- 第15図 大谷池遺跡92-1区 調査区設定図
- 第16図 東壁断面図
- 第17図 口無池遺跡調査区位置図
- 第18図 口無池遺跡92-1区 調査区設定図
- 第19図 平面・断面図
- 第20図 出土遺物

図 版 目 次

- 図版第一 東円寺跡92-3区・92-4区
- 図版第二 東円寺跡92-6区
- 図版第三 久保城跡92-1区・大谷池遺跡92-1区
- 図版第四 口無池遺跡92-1区・出土遺物

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・VII

第1章 はじめに

平成4年度における熊取町内での文化財保護法に基づく土木工事等による埋蔵文化財の発掘調査届出件数（平成5年2月20日現在）は22件であり、昨年度より若干の増加となった。このうち、本町教育委員会が実施した発掘調査件数は8件、立会調査件数は8件であり、発掘調査に関しては平成3年度末に受付し今年度に入つて調査した5件を加えて計13件の調査を行っている。発掘調査の内訳は国庫補助対象事業が6件、民間事業4件、公共事業4件であり、立会調査の内訳は民間事業が2件、公共事業が6件である。

民間事業の開発要因は、遺跡外試掘調査を含めて宅地造成や共同住宅建設等に伴うものであり、比較的小・中規模な開発が大部分であった。昨年一時的に減少した個人住宅の建設に関しても再び例年並に増加してきている。泉南周辺地域の各種土地開発が急速に増加する中、本町においても土地価格の安定に伴い宅地開発を中心とした各種民間開発が例年以上の増加を見せることは容易に予想されよう。

本書では、東円寺跡3件、久保城跡1件、大谷池遺跡1件、口無池遺跡1件の計6件の個人住宅建設に伴う発掘調査結果について概要を報告することとする。



第1図 熊取町の位置

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

能取町は大阪府の泉州地域のほぼ中央部に位置し、東を貝塚市、北及び西・南を泉佐野市と、四方を2市に囲まれた町である。町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと南北に長い木の葉形を呈しており、総面積は約17平方kmを有する(第1図)。

地形による面積比をみると、山地が41%、丘陵24%、段丘23%、低地12%に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約3分の2を占めている。地域別にみると町南部においては泉州地域の基本山地となる和泉山地が大部分を占めており、北部は和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。又、北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。

町域に水源をもつ河川は大別して見出川・雨山川・住吉川の3つの水系が存在している。3河川とも町南部の山間部を水源として南部から北部へ向かって流下し、泉佐野市を流下して大阪湾に注ぎ込んでいる。いずれの河川も下流部分が他市域を流れることに加えて、当町域が瀬戸内式気候区の東端に位置しているため年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの灌漑施設が存在している。特に現在においても町内随所で灌漑に用いられた多くの溜め池を目にすることができる。

第2節 歴史的環境

当町内の遺跡数は現在38ヶ所あげられているが、文献史料・建造物・民俗等に比べて調査は全体的に遅れており、遺跡の範囲・性格等の不明確なものが未だに多く存在しているのが現状である(第2図)。

旧石器・縄文時代については、従来より池ノ谷遺跡(4)が旧石器時代の遺物散布地とされているが詳細は不明である。又、成合寺遺跡(8)からは縄文時代の石鎌・スケレイバー等の石器類が出土している。

弥生時代になると、前述した成合寺遺跡の他、東円寺跡(6)からも石鎌等が出土しており、今後東円寺跡周辺で同時代の遺物・遺構が検出される可能性もある。住吉川流域の低位段丘上に立地する大久保B・大久保E遺跡(28・37)は弥生時代後期から終末期を中心とする遺跡である。特に近年行われた大久保E遺跡の発掘調査において、溝等の遺構から終末期に比定される土器が大量に投棄された状態で出土しており、今後周辺



第2図 熊取町内遺跡分布図

域から当該期の集落が検出される可能性は非常に高いといえる。

古墳時代については、五門北古墳・五門古墳（12・13）が古墳であったとされるが現在は既に消失しており詳細は不明のままである。他に同時代の遺構・遺物は検出されておらず、本町においては不明瞭な時代といえる。

奈良・平安時代の遺構としては、東円寺跡（6）から8世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また、平安時代末頃には同遺跡名でもある「東円寺」が建立されたことが出土瓦により窺われる。

中世では、前述した東円寺跡から13世紀代の掘立柱建物が現在までに10棟以上検出されており、奈良時代以降中世に至るまでこの周辺域に村落・社寺が形成されていたことを窺い知ることができる。成合寺遺跡（8）は14世紀代を中心とする中世墓地遺跡であり、約600基の土壙墓群や掘立柱建物が検出されている。又、大浦中世墓地（14）も13世紀から15世紀にかけての中世墓地遺跡であり、近年の発掘調査の際に出土した多くの中世五輪塔・石仏に混じって、当町の在銘五輪塔の中では最も古い享徳4年（1455年）銘の人った五輪塔の地輪が出上している。中世城郭は現在推定地を含めて6ヶ所存在するが雨山城跡（10）以外は詳細は不明である。又、5ヶ所の中世寺院跡推定地についてもほとんど未調査であり詳細は不明である。

近世については重要文化財の中家住宅・降井家書院といった建造物や中家文書等の文献史料が存在するため、埋蔵文化財よりも建造物・文献方面での調査が古くから進められており、近世熊取の様相が多岐にわたり研究・解明されてきている。埋蔵文化財の側では、降井家屋敷跡（25）の調査で旧来の降井家屋敷地を区画していたと考えられる溝を検出している。

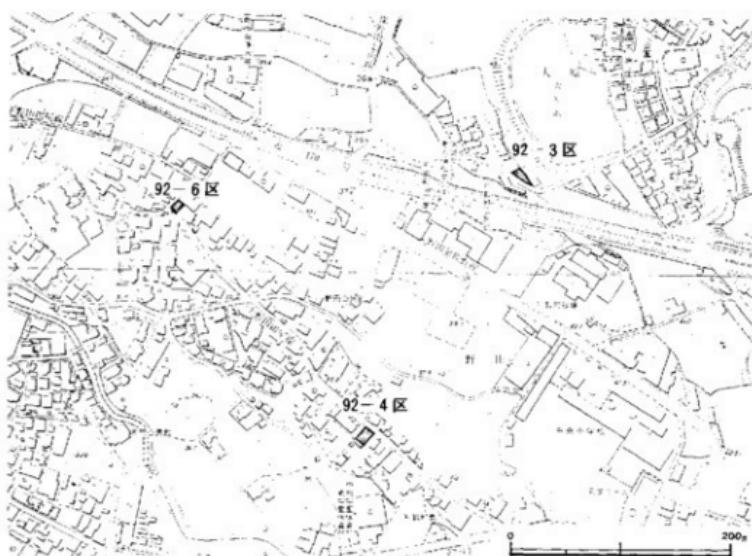
参考文献

- (財) 大阪文化財センター 「成合寺」 (1985.3)
- 熊取町教育委員会 『熊取の歴史』 (1986.11)
- タ 『熊取町埋蔵文化財調査報告』

第1集 (1986.3) ~ 第18集 (1992.3)

第3章 調査の概要

第1節 東円寺跡の調査

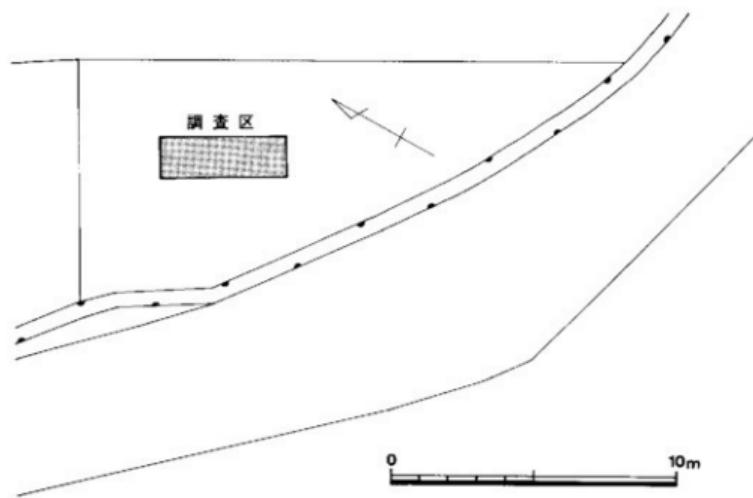


第3図 東円寺跡調査区位置図

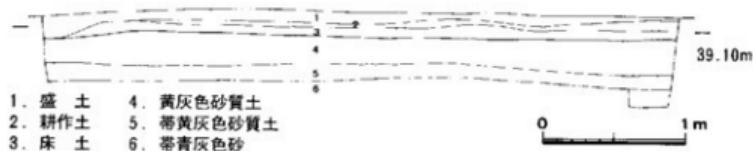
東円寺跡は熊取町の北東部、熊取町大字野田に所在し、熊取町役場及び公民館を中心とする付近一帯に広がる寺院・集落遺跡である。現在のところ東西約900m・南北約400mの遺跡範囲を有する。地形的には現在の大井出川（住吉川）の右岸域に形成される低位段丘上に立地している。

遺跡の名称である「東円寺（東曜寺）」は、出土瓦からみて平安時代末頃に建立されたといわれる寺院であり、付近に残る小字名により現在の熊取町役場・公民館の南側前面域に所在していたと想定されている。但し、「東円寺」に関する本格的な調査がなされていないため、どの様な伽藍構成を有する寺院であったかは不明である。

又、東円寺跡は集落遺跡としての性格も有している。本遺跡で集落遺構を示す最も古い事例としては奈良時代の建物群であり、公民館の南側前面域で行われた発掘調査で8世紀代の掘立柱建物群が検出されている。その後、中世になると遺跡範囲が大幅に広が



第4図 東円寺跡92-3区 調査区設定図



第5図 北壁断面図

りをみせるようになり、現在までに13世紀代に比定される掘立柱建物が10棟以上、又、同時期の各種遺構群が付近一帯の発掘調査で検出されるに至っている。

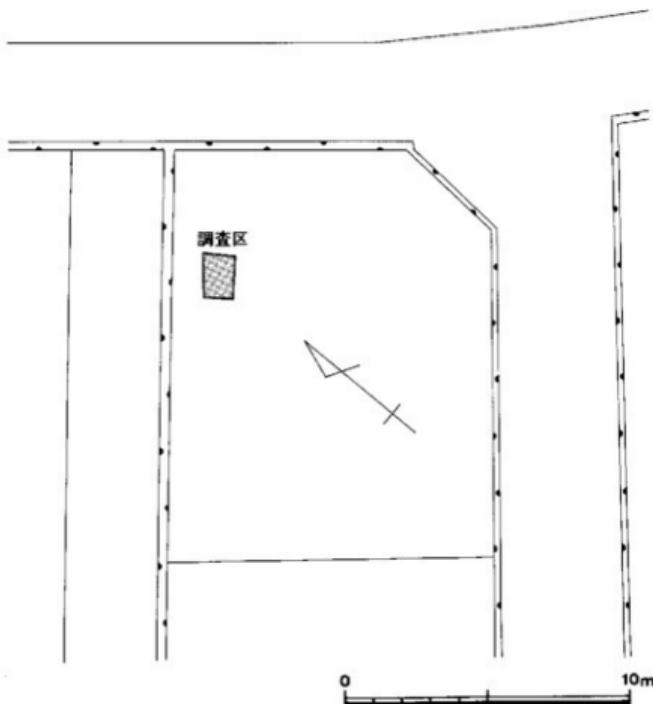
1. 92-3区の調査

本調査地は大阪外環状線を挟んで熊取町役場の対面にある大原池の堤防裾南端部に位置しており、東円寺跡の北東隅にあたる(第3図)。申請地番は熊取町大字紺屋260-1番地、申請面積は232.39m²である。

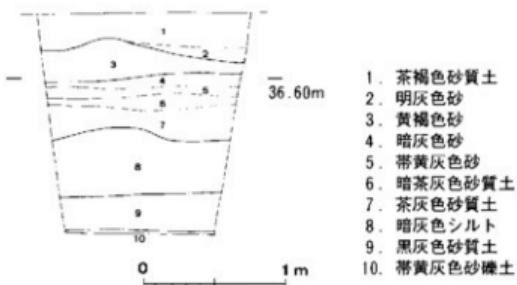
調査は個人住宅の新築工事に伴うものであり、工事に先立って調査地中央部に幅1.5m、長さ4.5mの南北に長い調査区を設定し、バックホー及び人力による調査を実施した(第4図)。

調査地は元耕作地であったが耕作土は調査時には既に一部除去され、その上に盛土が行われていた。耕作土以下の層序は床土（3層）・黄灰色砂質土（4層）・帶黃灰色砂質土（5層）・帶青灰色砂（6層）となる（第5図）。帶青灰色砂の上面で現地表面より-50cmを計る。

遺物包含層・遺構等は検出されなかった。又、遺物は出土していない。



第6図 東円寺跡92-4区 調査区設定図



第7図 東壁断面図

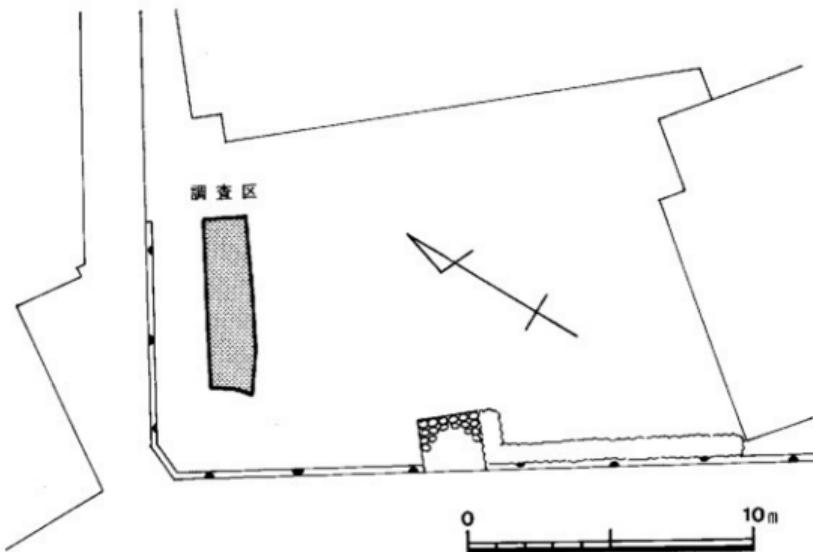
2. 92-4区の調査

本調査地は熊取町公民館の南約200mの地点に位置している(第3図)。申請地番は熊取町大字大久保2081-1・2082-1番地、申請面積は153.69m²であり、現況は宅地である。東円寺跡の中心部の南寄りに位置しており、8世紀代の掘立柱建物群が検出された発掘調査地点から約50m北の地点にあたる。

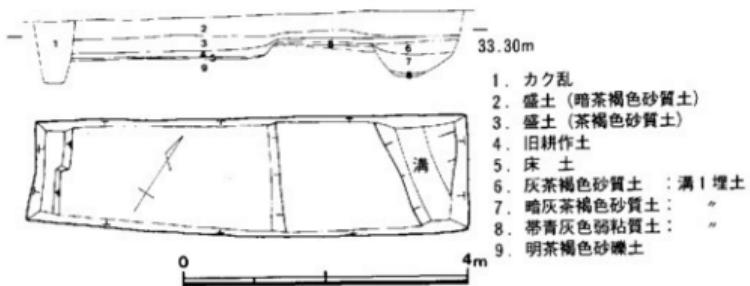
調査は個人住宅の新築工事に伴うものであり、工事に先立って便槽設置予定位置に調査区を設定し、人力による調査を実施した(第6図)。

基本層序は、茶褐色砂質土(1層)から暗灰色シルト(8層)までの約1.2mが近年の盛土であり、以下、有機質を含む黒灰色砂質土(9層)・帶黃灰色砂礫土(10層)が続く(第7図)。結果、盛土以前の本調査地は沼地状の湿地であったことが判明し、現地表面より1.5m掘削した時点で調査を終了した。

遺物包含層、遺構等は検出されなかった。又、遺物も出土していない。



第8図 東円寺跡92-6区 調査区設定図



第9図 平面・断面図

3. 92-6区の調査

本調査地は東円寺跡の西側に位置している(第3図)。申請地番は熊取町大字野田2406番地、申請面積は495m²であり、現況は宅地である。

調査は個人住宅の建て替え工事に伴うものであるが、89年度に本調査地の南西約50mの地点を発掘調査した際に中世の遺構・遺物が検出されており、本調査地においても遺構の検出される可能性が高いと推測されたことから、既存木造建築物の撤去の後に幅1.7m、長さ6mの調査区を設定し、バックホー及び人力による調査を実施した(第8図)。

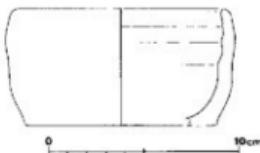
基本層序は、母屋及び旧建築物建設時期の盛土と思われる暗茶褐色砂質土(2層)・茶褐色砂質土(3層)の下に、旧耕作土(4層)・床土(5層)・地山土(明茶褐色砂礫土)(9層)が続く(第9図)。

遺構としては、宅地となる以前に存在した近世の旧水田の境界面と水田耕作継続時に機能していたと思われる溝を1条検出した(第9図)。

旧水田の境界部は調査区のほぼ中央部で検出された。旧水田は、現存する母屋にはほぼ平行するように北西方向に耕作境界線を持ち、北半部の面より約20cm低い耕作面を有するものであった。

溝は調査区北東隅で検出されている。東西方向に方位を持つ溝であり、検出面より溝幅約1m、深さ45cmを計る。溝断面はやや丸底ぎみとなる。溝内埋土は上層より灰茶褐色砂質土(6層)・暗灰茶褐色砂質土(7層)・帶青灰色弱粘質土(8層)の3層に分けられる。埋土より近世陶器片(第10図)・平瓦片が出土している。

期待された中世以前の遺構・遺物等は検出されなかった。



第10図 出土遺物

第2節 久保城跡の調査

久保城跡は中世に存在していたと考えられている城郭跡である。現在の熊取町大字久保地区を流れる見出川の左岸域を中心として矢ノ倉・的場・土居ノ内・中堀・荒堀等の小字名がみられることから、大森神社に隣接するこの付近に城郭が存在していたものと推定されている。

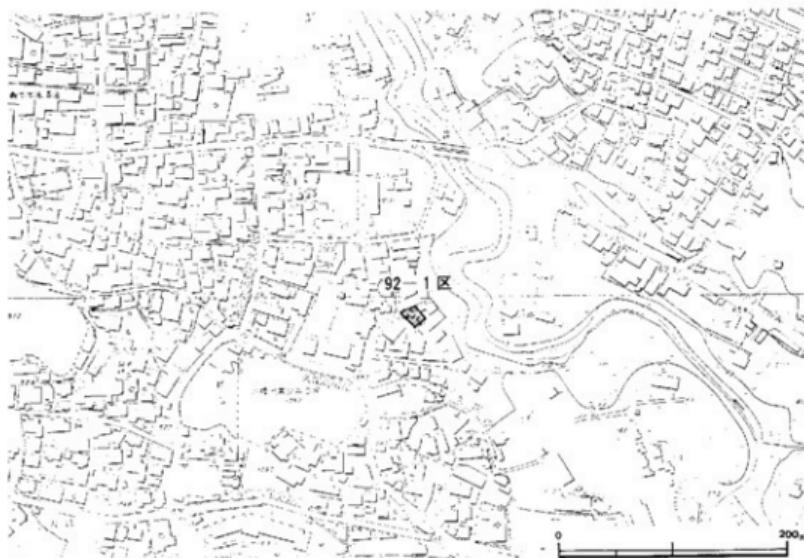
92-1区の調査

本調査地は大森神社の西方約70mに位置し、久保城跡の北西端にある。申請地番は熊取町大字久保1576番地、申請面積は約212m²であり、現況は宅地である(第11図)。

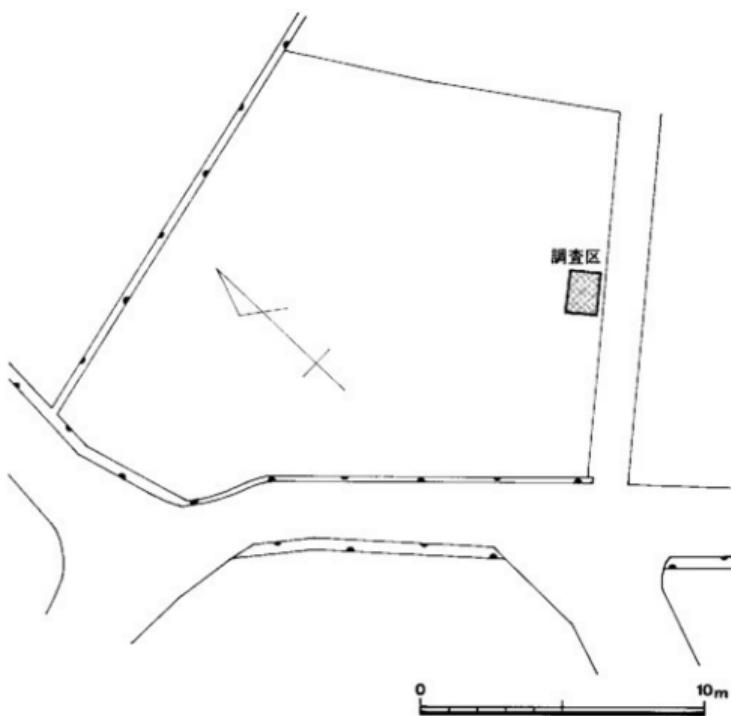
調査は個人住宅の建て替え工事に伴うものであり、既存建築物を撤去した後に便槽設置予定位置に調査区を設定し、人力による調査を実施した(第12図)。

基本層序は、盛土下より旧耕作土(3層)・床土(4層)・暗黄茶色砂質土(6層)と続き地山面(黄茶色砂質土)(7層)に至る(第13図)。

調査区中央部で壁面が垂直以上に切り込む円形土壙が検出されたが、埋土(暗灰褐色



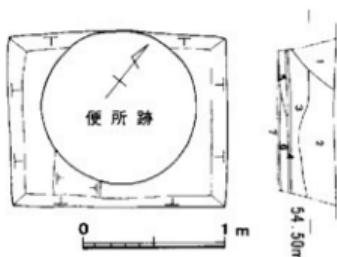
第11図 久保城跡調査区位置図



第12図 久保城跡92-1区 調査区設定図

小石混じり砂質土）が山耕作土を切り込んでいることから比較的新しいものであり、かつ、その様相から便所跡である可能性が極めて高いと判断し、地山面より約1m掘削した時点で調査を終了した。

遺物包含層、その他の遺構は検出されなかった。又、遺物も出土していない。



- | | |
|----------------|------------|
| 1. カク乱 | 5. 暗灰色粘質土 |
| 2. 盛 土 | 6. 暗黄茶色砂質土 |
| 3. 灰褐色砂質土：旧耕作土 | 7. 黄茶色砂質土 |
| 4. 床 土 | |

第13図 平面・断面図

第3節 大谷池遺跡の調査

大谷池遺跡は本町北西端に位置する丘陵中腹部に所在する大谷池とその周辺部を範囲としている遺跡である。大谷池の所在する丘陵裾の西側低地部には弥生時代後期を中心とする弥生時代から中世にかけての複合遺跡である大久保B・大久保D・大久保E遺跡が位置している。本遺跡については古墳時代から近世にかけての遺物散布地となっているが、遺跡の性格等詳細は解っていない。

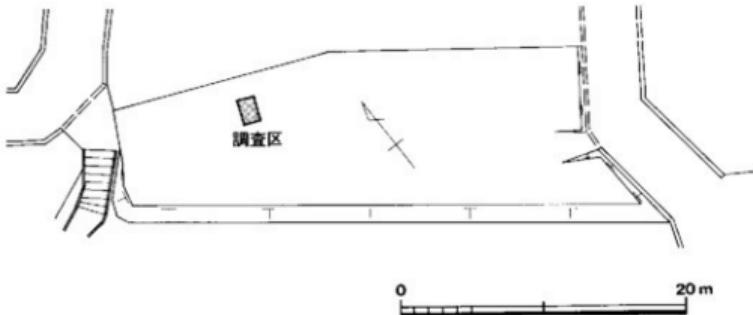
92-1区の調査

本調査地は大谷池の北岸中央部の北約20mに位置し、大谷池遺跡の北端部にある。申請地番は能取町大字大久保238-2・229-3番地、申請面積は370.21m²であり、現況は宅地である(第14図)。

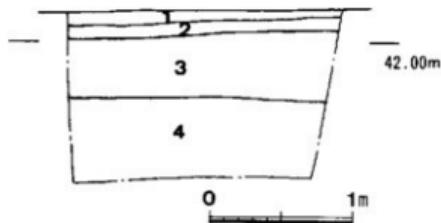
調査地は本来丘陵南側斜面上であったものを以前の宅地造成の際に南側部に多量の盛土を施すことにより宅地化しているものと思われた。このため、盛土が比較的に浅いと思われる北端側に調査区を1ヶ所設定し、人力による調査を実施した(第15図)。



第14図 大谷池遺跡 調査区位置図



第15図 大谷池遺跡92-1区 調査区設定図



- 1. 風化土
- 2. 浅黄橙色砂質土
- 3. にぶい黄橙色砂質土
- 4. 橙色砂質土：灰白色シルトのブロックを含む

第16図 東壁断面図

基本層序は、風化土の下に盛土である浅黄橙色砂質土（2層）・にぶい黄橙色砂質土（3層）が続き、すぐに地山土である橙色砂質土（4層）に至っており、遺物包含層は存在しなかった（第16図）。

地山面からは遺構は検出されなかった。又、遺物も出土していない。

第4節 口無池遺跡の調査

口無池遺跡は熊取町大字紺屋に所在する口無池とその南側に広がる遺跡であり、東円寺跡と紺屋遺跡の間に位置している。本遺跡については古墳時代から近世にかけての遺物散布地となっているが遺跡の性格等詳細は解っていない。

92-1区の調査

本調査地は口無池遺跡と紺屋遺跡との境に近接する位置にあたり、又、両遺跡共に詳細が不明確であることから厳密にはどちらの遺跡にあたるものか判断し難い地点に位置する(第17図)。申請地番は熊取町大字紺屋108-1番地、申請面積は約100m²であり、現況は宅地である。

調査は個人住宅の建て替え工事に伴うものであり、既存建造物を撤去した後に便槽設置予定位置に調査区を設定し、入力による調査を実施した(第18図)。

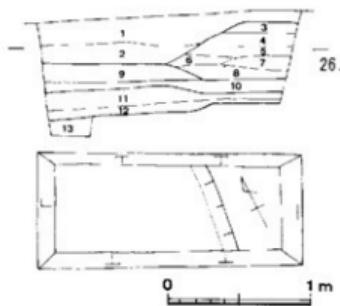
基本層序は、盛土以下に帶茶灰色砂質土(9層)・明灰色砂質土(10層)・黒褐色弱粘質土(11層)・暗灰色弱粘質土(12層)と続き、地山と考えられる帶青明灰色シルト



第17図 口無池遺跡 調査区位置図

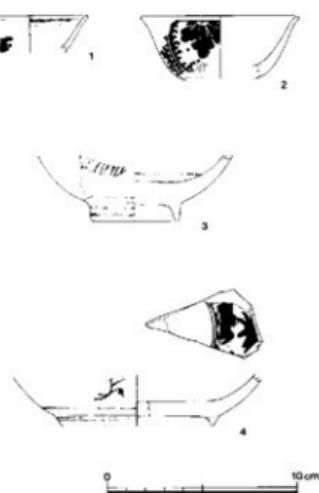


第18図 口無池遺跡92-1区 調査区設定図



1. 盛土（黄色砂質土）
2. 盛土（灰黄色砂質土）
3. 暗茶褐色砂質土
4. 暗黄灰色砂質土
5. 帯黄灰色砂質土
6. " : 5層より黄色帯びる
7. 暗灰色砂質土：黄色フロック混じる
8. 黄灰色砂質土
9. 帯茶灰色砂質土
10. 明灰色砂質土
11. 黑褐色弱粘質土：炭化物微量含む
12. 暗灰色弱粘質土：炭化物少量含む
13. 帯青明灰色シルト

第19図 平面・断面図



第20図 出土遺物

(12層)に至るが、撤去した木造建築物の基礎部分のかかった調査区東半部では基礎を版築方法により構築している(3層から8層)ことが断面より観察できた(第19図)。

ベース面において西側に向かって落ちる浅い落込み状の遺構が検出されている。埋上は暗灰色崩粘質土(12層)であり、土器片は含まないものの炭化物を少量含んでいた。11・12層に関しては時期的な決め手は欠くものの遺物包含層であることに間違いない層である。この層は隣接する紺屋遺跡の立会調査の際にも確認されており、さらに紺屋遺跡の西方に位置する大久保E遺跡等で検出されている弥生時代後期の包含層に極めて酷似している。このことをもって11・12層が弥生時代の遺物包含層であると断定することは危険であるが可能性として一考に入れておきたい。

遺物は近世以降の陶器片が出土している(第20図)。染付杯(1・2)は盛土内(2層)より出土し、染付碗(3)・染付皿(4)は9層より出土している。

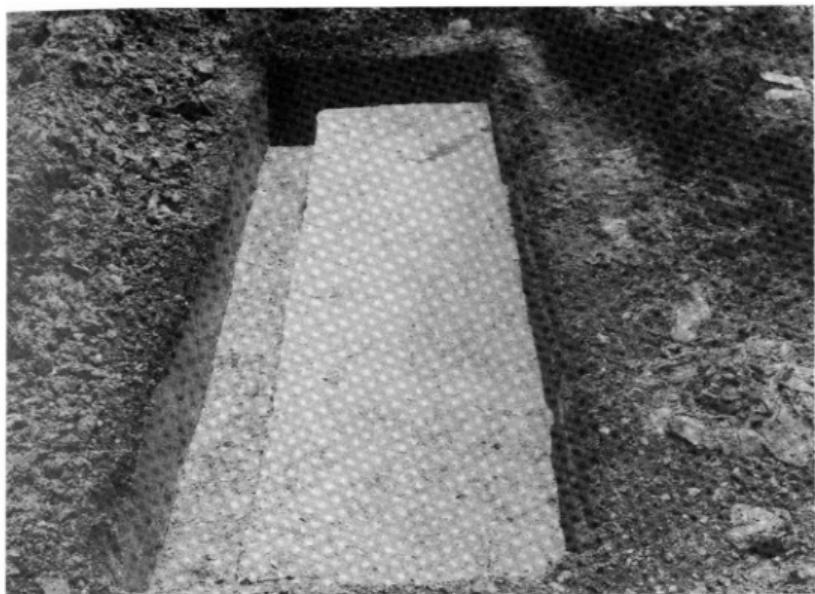
第4章 おわりに

前章で調査結果の概要を述べたとおり、本年度は東円寺跡・久保城跡・大谷池遺跡・口無池遺跡の4遺跡で計6件の国庫補助対象の発掘調査を実施した。成果として特筆できる遺構・遺物は検出されなかった訳であり、発掘成果の未だあがっていない久保城跡・大谷池遺跡・口無池遺跡については今回も不明瞭のままとなった。本町における埋蔵文化財調査は近隣他市町と比べてまだ日が浅く、東円寺跡や一部の遺跡を除けば他は詳細の解らない遺跡ばかりであるといつても過言ではない。

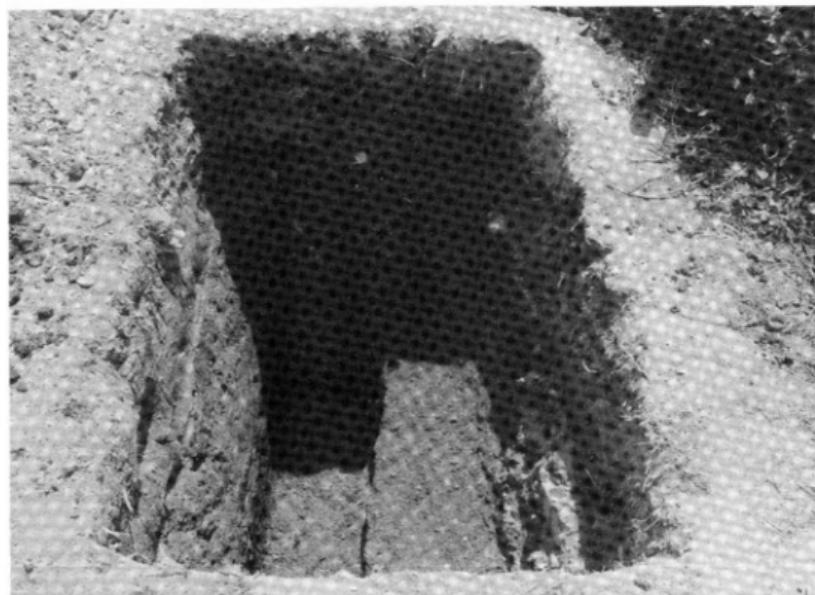
地方公共団体が現在主として行っている緊急発掘調査は各種開発行為に伴うものであり、大半がその地点における遺跡の破壊を前提としてなされているものである。主要な遺構が発見されたとしても保存が叶わなければそのまま永久的な遺構の破壊・消滅につながるのである。本町においても大半の遺跡は保存の叶わないまま破壊され消滅しているのが現状である。年を追って増加する開発に対応しうるだけの文化財調査体制の確立は当然のことながら、遺跡各個の把握、文化財保護活動の浸透等、文化財を後世まで保存し、活用する側の立場として今後早急に取り組むべき課題が多い。

図 版

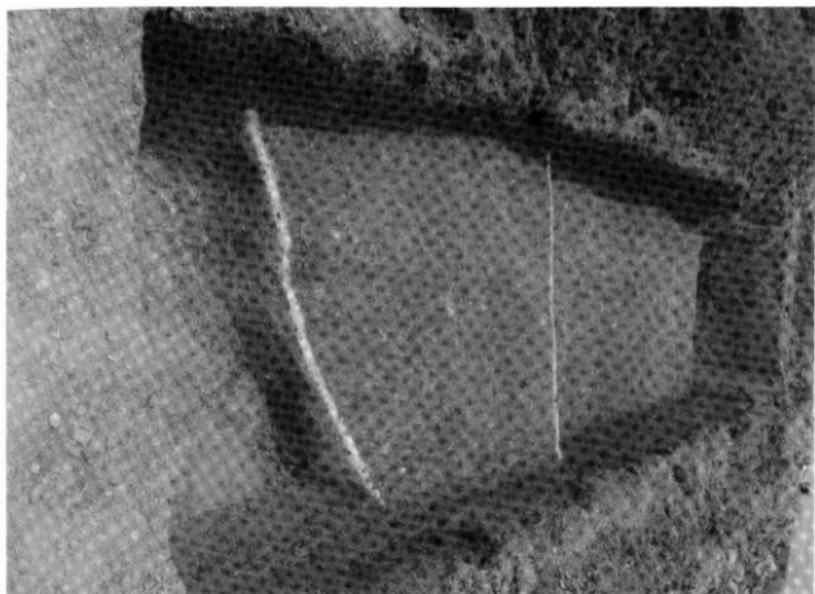
図版第一 東円寺跡
92-3・92-4区



92-3区 全景（北西より）



92-4区 全景（北より）

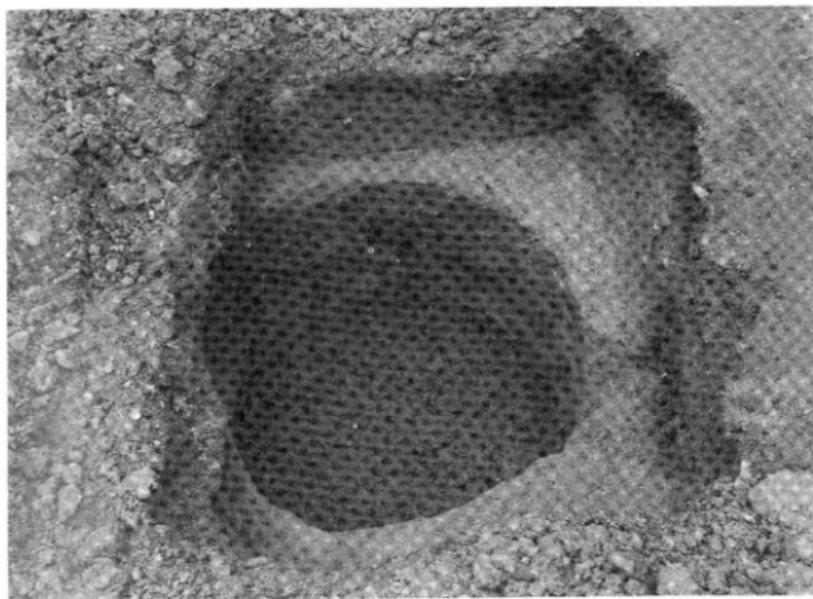


92—6区 全景（東より）

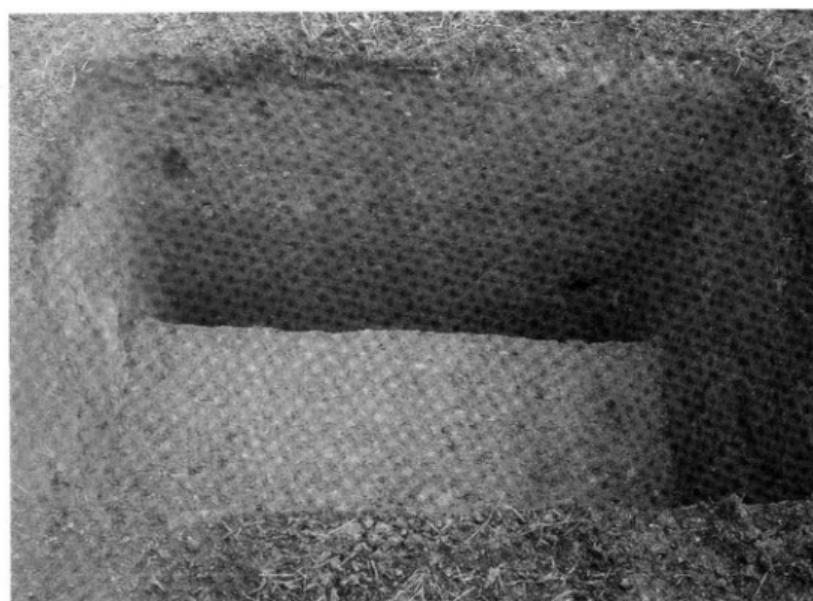


同 北壁

図版第三 久保城跡
92-1区・大谷池遺跡
92-1区

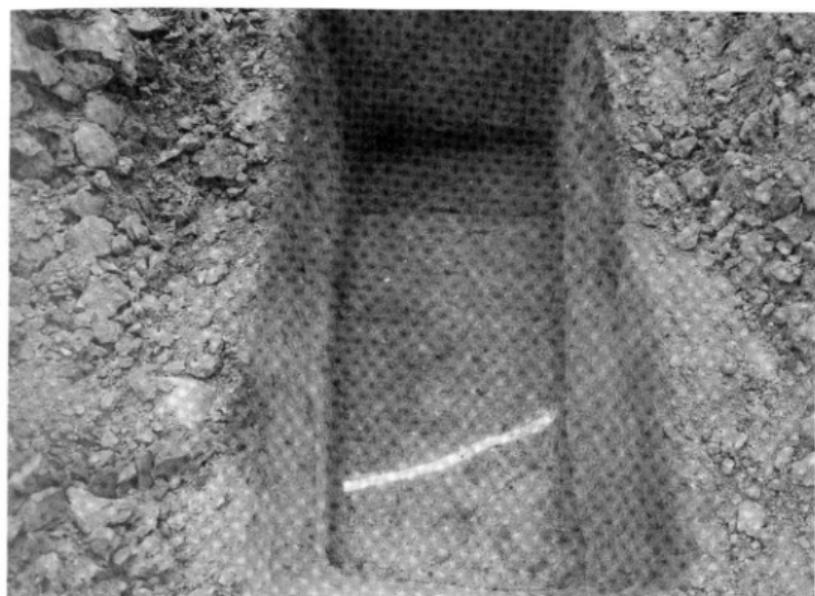


久保城跡 92-1区 全景（南より）

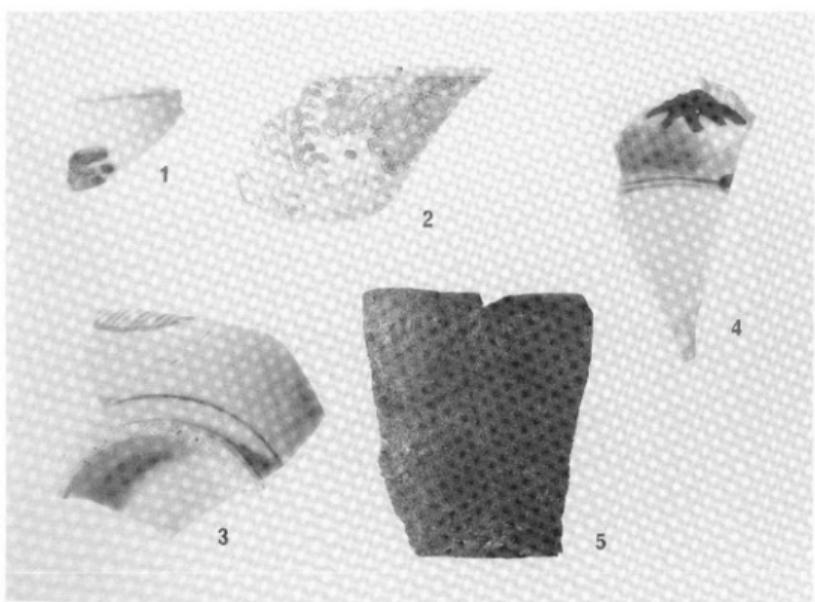


大谷池遺跡 92-1区 全景（西より）

図版第四 口無池遺跡 92-1区・出土遺物



口無池遺跡 92-1区 全景（東より）



1~4・口無池遺跡 92-1区 出土遺物

5・東円寺跡 92-6区 出土遺物

熊取町埋蔵文化財調査報告 第20集
熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・Ⅷ

平成3年3月31日、発行

発行・編集 熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町大字野川224番地

印刷 摂河泉文庫